

平成22年4月30日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005～2009

課題番号：17083026

研究課題名（和文） 中・近世朝鮮をめぐる東アジア交流と寧波

研究課題名（英文） Cross-Cultural Maritime Exchange in East Asia Involving Korea and its Relation with Ningbo during Medieval and Early Modern Times

研究代表者

森平 雅彦 (Morihiro Masahiko)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：50345245

研究成果の概要（和文）：本研究では中近世（10～19世紀）の朝鮮半島における東アジア諸地域との海上交流の様態をめぐり、ヒト・モノ・情報が海上を往来する具体的様相と、それを支える人間活動の実際について基礎的な事実関係の把握をめざした。主な成果は、①現地調査をふまえた高麗・宋間の航路と航海知識の復元、②中近世の朝中間漂流・漂着事件の事例集成と史料訳註、③朝鮮時代の海民（水賊）の実体解明、④近世朝鮮における沿岸防備体制の分析、⑤前近代朝鮮の港湾立地に関する国際比較、⑥朝鮮伝統船の構造分析などである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the basic facts about the cross-cultural maritime exchange over Korean Peninsula during medieval and early-modern times, such as the human interaction, the exchange of object and information, and the human activities supporting them. The main results were below. ①clarification of the sea route between Goryeo(高麗) and Song(宋) and analysis of knowledge concerning navigation of sea, based on the site investigation. ②Case collection and translation and annotation of historical materials concerning drifting and washing of ships that happened between Korea and China during medieval and early-modern times. ③Clarification of the realities of Su-jeok(水賊) in Joseon(朝鮮) era. ④Clarification of the system of coast defense in early-modern Korea. ⑤International comparison of harbor location in pre-modern Korea. ⑥Analysis of structure of traditional Korean ship.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,800,000	0	2,800,000
2006年度	3,300,000	0	3,300,000
2007年度	3,500,000	0	3,500,000
2008年度	3,500,000	0	3,500,000
2009年度	3,500,000	0	3,500,000
総計	16,600,000	0	16,600,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：東洋史、朝鮮史、日本史、寧波、海域交流

1. 研究開始当初の背景

本特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」では、海域交流の史実像と、交流の窓口となる沿岸部の個別ローカル・エリアの地域的個性に着目することで、前近代東アジアの国際交流と、その影響下で育まれた各地域の文化伝統に関する歴史像を根底から見直すことを目的としている。

これは、従来中国・朝鮮・日本等の国民国家の地域単位を対象として進められてきた人文学諸分野では、各地の社会・文化が国際的な交流のなかで展開してきたこと、そしてその交流の本質的性格は、日中関係・日朝関係といった大枠ではなく、寧波と博多、釜山と対馬といった個別の交流窓口の地域的個性に注目することで理解できることが、軽視ないし看過されがちであることにもとづく。

こうした研究視角上の問題点は、朝鮮史分野に関してとりわけ該当する部分である。本計画研究は、上記のような課題に、主として朝鮮中世・近世史研究の立場からアプローチするものである。

2. 研究の目的

上記の背景のもと、本計画研究では、中近世の朝鮮半島において、東アジア諸地域との海域交流がどのように展開したのか、とりわけ東アジアの海域交流においてハブ機能を発揮した中国江南地方との交流を焦点として、その特質を研究した。

ただし朝鮮史研究では、従来海域交流史および海事史に関する研究が手薄である。そこで本研究では、海域交流を理解するうえで不可欠な基礎情報として、ヒト・モノ・情報が海上を往来する具体的様相と、それをささえる人間活動の実態について、基本的な事実関係の解明を当面の分析課題と定めた。

また中国江南地方との交流を焦点としつつも、他の東アジア諸地域との海域交流に目を配ることで、東アジア全体の海域交流のなかでの朝鮮半島の位置を明らかにし、ひいては本特定領域研究の焦点である寧波をはじめとする江南沿岸部の、海域交流における歴史的位置を理解するための参考素材を提供することにつとめた。

具体的な作業としては、個別の時代、ないし中近世全体を特徴づける象徴的な論点をピックアップし、これについて基礎的な調査・分析をくわえた。これらの各論点は、今後ひきつづき朝鮮半島をめぐる海域交流史の全体像を効率的かつ効果的に描きだしていくためのトレンチ（試掘坑）として位置づ

けるものである。

3. 研究の方法

(1) 個別の検討項目

具体的には次のような事項について研究分析を行った。

①高麗時代における宋との海上航路

高麗時代（918～1392）は朝鮮史上最も海域交流がさかんな一時期であり、その焦点は中国の宋との交流であった。本研究ではその実態（担い手の性格、造船・航海技術、自然条件、海上交通をとりまく政治・社会・経済的諸条件）を解明するための基礎的な手がかりとして、高麗・宋間の海上航路と航海の具体的状況を克明に分析する。

②朝鮮時代における中国との漂流・漂着事件

朝鮮時代（1392～1910）には中国との交通が基本的に陸路に限られ、海を通じた相互交流は漂流・漂着事件が主要な形態となる。近年、近世東アジア各国で漂流民の送還がシステム化されていたことが注目され、当時の国際関係を規定する体制として重視されている。本研究では、いまだ研究の進んでいない朝中間で発生したその事案について、基礎的な事例の収集と解析を行う。

③朝鮮半島沿岸における海民

朝鮮半島沿岸部における海民の活動は、古代以来確認される所であり、その存在はいわゆる「倭寇」に象徴される、東アジアの国際貿易や海賊事件との関わりで注目されてきた。本研究ではこのうち特に、朝鮮時代の「水賊」と呼ばれる人々の実像について、史料にもとづき検証を行う。

④朝鮮時代の沿岸防備体制

朝鮮時代は域外との海上交通が一部の例外を除いて禁止され、沿岸部には水軍・哨所・烽燧等の警備・防衛機構が稠密に配置されていた。本研究ではその指揮系統・実務内容を官庁記録にもとづいて具体的に解明する。

⑤朝鮮伝統港湾の立地・形態

港湾の在り方はそれが窓口となる海域交流の在り方を理解する手がかりとなり、朝鮮史以外の分野では海域交流史と関連して港湾・港市研究が大きな成果をあげている。本研究では朝鮮半島沿岸における伝統的な港湾の立地と形態について、周辺地域との比較を通じてその特徴を明らかにする。

⑥朝鮮伝統船の特質

朝鮮の伝統的な構造船については、いくつかの部分的な事例と部分的な構造からその特質が論じられる段階にとどまっている。ま

た朝鮮伝統船は外洋航海に不向きであるという一般的理解に制約されて、朝鮮時代唯一の航洋船である通信使船に関する理解が深まっていない。本研究では朝鮮伝統船の構造を、近代初頭の民俗学・工学的調査資料などを利用して、詳細かつ体系的に分析する。

(2) 調査研究の方法

①個別の史料収集と分析

歴史学のオーソドックスな手法にもとづき、各テーマに関して個別に史料収集とその分析を行った。特に史料収集作業の一環として、高麗時代の対宋関係に関する朝鮮史料、朝鮮時代の朝中間漂流・漂着事件に関する史料についてデータベースを作成した。

②共同史料検討会の実施

本研究における問題意識と知見を共有、深化させるため、15世紀末期の朝鮮官人崔溥の中国漂流記『漂海録』を素材として、共同の史料訳註作業を原則として2ヶ月に1回のペースで実施した。

③現地調査の実施

文献情報を現地状況と対照することで史料読解の精度を高めるべく、関係地の立地・地勢・生活条件などの地理・自然・民俗情報、および石刻等一次史料・史跡・オーラルヒストリーなどの現地資料について、フィールド調査を実施した。

主要な調査対象地は次の通りである。済州島、黒山諸島、荏子島、鞍馬島、蝟島、古群山群島、外烟列島、泰安半島、徳積群島、永宗島、江華島、喬桐島（以上韓国）、寧波、舟山列島（以上中国）、五島列島、的山大島、薩摩硫黄島、小呂島、相島（以上日本）。

④他計画研究との連携

前述のように朝鮮史分野における海域交流史ないし海事史の研究実績は乏しいため、本特定領域研究の計画研究のうち、日本史・中国史など周辺分野における海域交流史のグループと連携し、現地調査、史料検討会、ワークショップ・シンポジウム等を共同で実施することにより、その成果、知見、手法を学んだ。とりわけ本特定領域研究の中核事業のひとつである「東アジア海域世界の理論化」作業に本計画研究の全メンバーが参与することで、海域史の観点を朝鮮史研究に導入するうえで多大な示唆を得た。

4. 研究成果

(1) 高麗時代における宋との海上航路

①高麗・宋間の最も主要な海上航路である南方航路に関する根本史料として、1123年に高麗を訪れた宋使の見聞記、徐兢『宣和奉使高麗図経』（以下『高麗図経』と略称）におさめられた航海記録を分析し、周辺史料、地理・海事資料（地形図・海図・水路志）、現

地調査で得られた情報を駆使することで、朝鮮半島沿海における宋使船の経路地を次のように比定した。

夾界山（可居島）→五嶼（局屹群島）→排島（三苔島）→白山（紅島）→黒山（大黒山島）→月嶼（許沙島）→蘭山島（扶南島）→白衣島（笠帽島・屈島・葛島）→跪苦（在遠島）→檳榔焦・春草苦（飛雉島）→菩薩苦（角耳島）→竹島（鞍馬島）→苦苦苦（蝟島）→群山島・横嶼（古群山群島）→馬島（安興半島）→九頭山（蔚島ないし同島一帯）→唐人島（仙甲島）→双女焦（文甲島）→大青嶼（墨島）→和尚島（徳積島）→牛心嶼（伊作島）→聶公島（紫月島）→小青嶼（八尾島）→紫燕島（永宗島）→急石門（孫石項）→蛤屈・龍骨（江華島）→礼成港（礼成江河口）（※以上の概要については下図を参照）



また付随して、中間寄港地である群山島におかれた迎賓館である群山亭の設置地点について、史料の記述と現地の地形、陶磁器・瓦等の遺物散布状況から、古群山群島の主島である仙遊島の望主峰南麓に比定した。

以上の分析を通じて、船舶運航の実情について次のようなことが明らかになった。

②宋使船は朝鮮半島西岸多島海域の外縁部、外洋に近い水域を通過しており、沿岸直近を航行した朝鮮時代の域内航路とは異なる。

③宋使船は中国近海でも通常行わない夜間航行を朝鮮沿海で実施した。また朝鮮半島南西島嶼部に正確にアプローチするためのランドマークとして済州島を利用したとみられる。さらに朝鮮半島西岸の潮流をたくみに利用して航海した。これらのことから、現場海域の地理・自然環境に対応する豊富な航海の知識と技術を有したと推定される。

④ただしそうした航海は、夜間航標（烽火）の運営、大黒山島・古群山群島・安興半島・永宗島に設けられた中間迎接施設、蝟島など島嶼住民との物々交換のごとく、高麗側の官

民にサポート態勢が存在することによって成り立った。さらには朝鮮の民間航海信仰が宋船員の信仰対象とされたこと、朝鮮沿海に関する宋船員の知識が高麗人の同乗経験とその情報提供によって蓄積されたとおもわれることなどから、高麗人のサポートは物心両面にわたっていたといえる。

⑤近年、この時代の東アジア海上交通の担い手は、もっぱら漢人海商であったとみられているが、それは航海責任者レベルの話であり、彼らの航海は上記のような渡航先社会の有形・無形のサポートがあってこそ実現したことに注意する必要がある。

⑥以上の研究過程で収集した朝鮮史料については、「高麗・宋関係朝鮮史料集初編」として冊子および CD-ROM（附：『高麗図経』の全文データベース）を作成した。

(2) 朝鮮時代の中国との漂流・漂着事件

①朝鮮時代に中国明清との間で発生した漂流・漂着事件について、朝鮮王朝の外交通訳担当官庁である司訳院の記録『通文館志』、および外交文書集である『同文彙考』より関係記事を集成し、「近世朝中間漂流漂着関係資料集」を冊子・CD-ROM 化した。

②15 世紀末の朝鮮官人崔溥の江南漂流記録である『漂海録』について、東洋文庫（東京都文京区）蔵本を底本として、金澤文庫（神奈川県横浜市）蔵本・陽明文庫（京都府京都市）蔵本との字句対照・校勘を行ったうえ、先行する訳註本の誤りを訂正して、新たな訳註を作成した。その過程では、とりわけ海域交流史・海事史に関する重要項目について指摘した。例えば濟州島水精寺の僧侶が良質な船を所有していること、船上の「軍人」が水夫を意味すること、難船時における船上作業の内容、中国海民の胡椒に対する関心、その頭目の観音仏の自称、船具・船材の名称（風梢・鼻隅、三板など）、朝鮮西南部の船乗りが山神（無等山・錦城山など）や濟州島の地方神を航海信仰の対象としたこと、季節風に関する知識などである。

以上のうち、漂流記録部分を「崔溥『漂海録』漂流記録訳註（稿）」として冊子・CD-ROM 化した。

(3) 朝鮮半島沿岸における海民

①朝鮮政府の記録にあらわれる「水賊」の実体について、主に『朝鮮王朝実録』の記事を素材として分析した。1474 年の史料を初見とするこの語については、かつて濟州島出身の海民勢力と規定されたこともあったが、要するに「朝鮮政府が朝鮮人による海賊集団および海賊行為を倭寇のそれと区別するために用いた呼称」であると定義し得る。

②「水賊」には濟州島の海民も含まれるが、全羅道南部沿海住民が多く関わっていたこ

とがうかがわれ、また対馬人をはじめとする倭寇を誤認したケースも少なくない。さらに 16 世紀になると朝鮮半島西岸から西北岸にかけて出没する朝鮮人海賊も「水賊」と表記されるなど、その実体は時期によって多様であることが明らかになった。

(4) 朝鮮時代の沿岸防備体制

①朝鮮時代の沿岸防備体制を検討する素材として、19 世紀の慶尚道沿岸における「未弁船」（正体不明の不審船）に対する軍営と官衙の対応プロセスを分析、解明した。史料としては、釜山倭館（対馬藩の出張所）関係の業務を担当する地方官衙である東萊府の状啓（国王への報告・連絡文書）を集成した『東萊府啓録』におさめられた「未弁船」関係の公文書を主な素材とした。

②その結果、慶尚道沿岸に来航・接近した「未弁船」への対応手順の詳細は、発見海域によってそれぞれ異なっていたが、発見から乗船者に対する事情聴取、倭館への護送にいたるまでの大枠の流れ、各地に配置された水軍営鎮等の指揮系統にそって、体系的かつ画一的に行われていたこと、また水軍営鎮のみならず、関係海域に近い邑の地方長官も探索・確保、護衛・監視などの業務に深く関与していたことが判明した。

③「未弁船」に関する情報は、最終的に釜山僉使（釜山の水軍鎮の指揮官）のもとに集約されることになっており、発見海域により関係者の顔ぶれはかわるが、基本的には水軍の指揮系統にそって伝達されていたことが明らかになった。

(5) 朝鮮伝統港湾の立地・形態

①朝鮮半島西岸における港湾立地を象徴的に示すサンプルとして、黔毛浦鎮址（全羅北道扶安郡）、蟬島（同前）、群山島（全羅北道群山市）について分析を加えた。

②朝鮮時代の水軍基地である黔毛浦鎮址は、広大な干出沙泥堆がひろがる朝鮮半島の西南部にあり、深く湾入した苗浦湾奥の北岸に位置する。港を管理する黔毛浦鎮の官衙は港そのものから北に数 km 離れた山麓に展開しているが、所属軍船の係留地はその南東に位置する虎島の後背（北側）にある。ここは苗浦湾の滯筋から河川にそって虎島を回り込んだ場所であり、かつては低湿地のなかに比較的広い水面が広がっていたとみられる（現在は塩田として利用）。港はもう 1 ヶ所、官衙の南西で滯筋に面した熊淵島の南面にもあり、こちらは湾の対岸への渡し場だったとみられる。これら 2 ヶ所の港には集落が付随していたようであり、官衙と不可分にむすびついた港町を形成していたと推定される。

比高のある場所に設置された官衙と、深く湾入した干潟地帯の滯筋直近の港町とその

船だまりという組み合わせは、現代にいたるまで、朝鮮西南部の代表する伝統的港町である法聖浦などでも確認される。西海岸における港湾の立地・形態の1つの典型をなし、このことは、拠点城館とそれに付随する港町から港湾が形成されている日本列島の日本海・玄界灘沿岸の中世港湾とも対比される。③こうした朝鮮西海岸の伝統的港湾は、この海域を特徴づける大きな干満差（最大時 9m 超）に対応して運用される。現代の港は、築堤によって、干満の影響を受けずに着船できるようにしたものが多いが、伝統的な港湾はしばしば完全に干出する場所にあり、停船中には干潟上に船を安座させるか、それを避けるならば干出しない湾央や滞筋に錨泊することになる。こうした港湾の立地と利用方法は、古群山群島、蝸島など西海岸の島々でも歴史的に観察される。かかる立地条件は、干満差が小さい日本列島の日本海岸の中世港湾（温泉津）などで、きわめて狭窄した入江に立地し、船繋ぎ石などの係留施設が海面近くにおかれている事例とは対照的である。

(6) 朝鮮伝統船の特質

①朝鮮時代以前の伝統船に関する研究史を分析した結果、その多くが、朝鮮総督府水産試験場による朝鮮伝統漁船に対する調査報告書（『漁船調査報告』第1～3冊、1924・28・29年）を参考していること、しかしながら、その報告書に対する考察は、各研究者の関心に沿った部分にしか及ばない限定的なものであることが確認された。

②そこで『漁船調査報告』そのものの資料的性格を検討したところ、本書のデータは、従来の研究が関心を寄せてきた西岸の船舶のみならず、南岸・東岸に関しても豊富なデータを収めていること。かつ従来の研究が注目してきた部分的な構造のみならず、船体各部の包括的な名称と寸法、施工法、船匠・船価・工具、漁具・漁法など総合的なデータを含有していること。そのデータからは、朝鮮伝統船に地域的多様性が看取されること。したがって、従来のような西岸域の船舶をもって朝鮮伝統船を代表させる単純な見方は改められねばならないことが明らかになった。

またその一方で、近代造船工学を基準として朝鮮在来漁船の「欠陥」と「改良」すべき点を見極めようという調査者の態度が観察・評価に一面性を生じていること、いかなる事情によってか、特定の地域に関して特定の調査項目のデータが漏落していることなど、資料として利用するうえで注意すべき点も明らかになった。

③以上を踏まえたうえで指摘し得る朝鮮伝統船に共通した構造的特徴（欠点）は、次のような点である。1）横強力の弱さ、2）縦通材の不充分、3）竜骨の不備、4）平坦な

船首、5）舷弧の小ささ、6）隔壁の不備、7）水密の不充分、8）部材接合の不充分、9）舵床の弱さ、10）固定釘の施工の不充分、11）船匠の技術の拙劣。

ただしこれらの「欠点」は、近代的合理性とは別の次元において、朝鮮の自然条件・社会環境が然らしめる必然性ないし一面の有用性を、今後さらに探究しなくてはならない。

(7) その他

以上の主要な検討課題に加えて、朝鮮半島をめぐる海域交流史の事例分析として、壬辰丁酉の倭乱（文禄慶長の役）に際して日本軍が朝鮮半島南岸に築造した倭城をめぐる人間交流の諸側面、朝鮮前期において東南アジア・琉球・日本を結んで展開された香辛料貿易の実像についても分析を行った。

(8) シンポジウム等の開催

本計画研究として下記のような公開シンポジウム・ワークショップを主催し、研究成果の学界および社会への還元をはかった。

①国際ワークショップ《火器技術から見た海域アジア史》、2006年1月17日、計画研究「11～16世紀の東アジア海域と寧波—博多関係」「寧波地域における日明交流の総合的研究」との共催、九州大学

②国際ワークショップ《朝鮮海事史の諸問題》、2007年1月7日、東京大学

③国際ワークショップ《韓日海洋史研究の最前線》、2008年11月27日、木浦大学校島嶼文化研究所との共催、木浦大学校（韓国）

④ワークショップ《朝鮮時代の絵画とその周辺—時代背景への視点—》、2009年3月1日、静岡県立美術館との共催、静岡県立美術館

⑤シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、九州史学会朝鮮学会との共催、九州大学

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計36件）

①森平雅彦、全羅道沿海における宋使船の航路：『高麗図経』所載の事例、史淵、147輯、査読無、2010、pp. 103-145

②村井章介、倭寇とはだれか：14～15世紀の朝鮮半島を中心に、東方学、119輯、2010、査読有、pp. 1-22

③森平雅彦、黒山島海域における宋使船の航路：『高麗図経』所載の事例から、朝鮮学報、212輯、査読有、2009、pp. 1-45

④六反田豊、19世紀慶尚道沿岸における「朝倭未弁船」接近と水軍営鎮等の対応：『東萊府啓録』にみる哲宗即位年（1849）の事

例分析、大阪市立大学東洋史論叢、別冊特集、査読無、2009、pp.157-187

- ⑤長森美信、近世朝鮮漂流民と東アジア海域、李泰鎮教授停年紀念論叢刊行委員会編『世界のなかの韓国』(太学社)、査読無、2009、pp.238-266、韓国語
- ⑥森平雅彦、高麗群山亭考、年報朝鮮學、11号、査読無、2008、pp.29-53
- ⑦森平雅彦、高麗における宋使船の寄港地「馬島」の位置をめぐる：文献と現地の照合による麗宋間航路研究序説、朝鮮學報、207輯、査読有、2008、pp.1-47
- ⑧六反田豊、朝鮮史からみた「海域史」研究、アジア遊学、100号、査読無、2008、pp.174-176
- ⑨村井章介、朝鮮史料から見た「倭城」、東洋史研究、66巻2号、査読有、2007、pp.69-106
- ⑩六反田豊、近世日朝関係における「交流」の諸相、韓国朝鮮の文化と社会、5号、査読有、2006、pp.14-36
- ⑪村井章介、寺社造営料唐船を見直す：貿易・文化交流・沈船、歴史学研究会編『港町の世界史1：港町と海域世界』(青木書店)、査読無、2005、pp.113-143

[学会発表] (計44件)

- ①森平雅彦、高麗・宋通交をささえた海の知識と技術、九州史学会朝鮮學部会シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、九州大学
- ②村井章介、15世紀朝鮮・南蛮の海域交流：成宗の椒種求請一件から、九州史学会朝鮮學部会シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、九州大学
- ③六反田豊、15・16世紀朝鮮の「水賊」、九州史学会朝鮮學部会シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、九州大学
- ④長森美信、朝鮮総督府『漁船調査報告』にみる植民地期朝鮮伝統船：1910年代の在来型漁船の船体構造、九州史学会朝鮮學部会シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、九州大学
- ⑤森平雅彦、高麗・宋通交と朝鮮西南島嶼、韓国朝鮮文化研究会10回大会シンポジウム《全羅道への地域研究的アプローチ：環シナ海の視点から》、2009年10月24日、慶応大学
- ⑥長森美信、朝鮮伝統船研究の現況と課題：通信使船を中心に、九州史学会朝鮮學部会、2008年12月14日、九州大学
- ⑦森平雅彦、文献と現地の照合による麗宋間航路研究、国際ワークショップ《韓日海洋史研究の最前線》、2008年11月27日、木浦大学校(韓国)

⑧六反田豊、朝鮮時代海事史研究の課題と可能性、国際ワークショップ《韓日海洋史研究の最前線》、2008年11月27日、木浦大学校(韓国)

⑨長森美信、朝鮮近世の船と人・物の移動—朝鮮近世水上交通史研究の現住所、国際ワークショップ《韓日海洋史研究の最前線》、2008年11月27日、木浦大学校(韓国)

⑩村井章介、Who are Medieval 'Japanese Pirates' (Wako)?—On the polemic at the Japanese-Chinese joint research in history, International Conference "History Education and Reconciliation—comparative perspectives on East Asia", 2008年10月15日、Georg-Eckert-Institut für Internationale Schulbuchforschung (ドイツ)

⑪六反田豊、朝鮮半島における不審船の接近への地方官の対応について—『東萊府啓録』を素材にして、国際シンポジウム《東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策》、2008年2月3日、大阪市立大学

⑫村井章介、朝鮮人から見た倭城、朝鮮通信使400年記念国際シンポジウム《アジアのなかの日朝関係史》、2007年12月15日、九州国立博物館

⑬森平雅彦、黒山群島海域における宋使船の航路、九州史学会朝鮮學部会、2007年12月9日、九州大学

[図書] (計9件)

- ①村井章介、東アジアにおける中世韓国と日本、景仁文化社、2008、544p。(韓国語)
- ②村井章介、境界をまたぐ人びと、山川出版社、2006、100p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森平 雅彦 (Morihiro Masahiko)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：50345245

(2) 研究分担者

村井 章介 (Murai Shosuke)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：30092349
六反田 豊 (Rokutanda Yutaka)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：40220818
長森美信 (Nagamori Mitsunobu)
天理大学・国際学部・講師
研究者番号：50412135
(平成19年度より)